仙台大学紀要
Vol. 42, No.2: 95-114, 2011

研究資料

ゴールデンエイジにおけるバスケットボール指導法に関する調査研究

児玉　善廣　　佐藤　久夫　　大神　訓章[1)]
本間　正行[2)]　　南條　佑太　　葛西　太勝[3)]

Yoshihiro Kodama, Hisao Sato, Kuniaki Oga[1)], Masayuki Honma[2)], Yuta Nanjyo, and Hirokatsu Kasai[3)]: Research on teaching golden age of basketball. Bulletin of Sendai University, 42 (2): 95-114, March, 2011.

Abstract: This study, the Northeast (three counties), conducted a survey of elementary and middle school basketball team located in, but to clarify the situation in the field of teaching elementary and middle school sports, basketball, etc. in the way of guidance for future Golden Age The aim is to obtain materials for consideration.　Specifically, 21 items were examined for the teaching environment.

The result confirmed the for points above.

1. Instructional method:　Overall, the guidance notes that an emphasis on human facets can be considered taking into account the content and teaching sex and stage of development of individual players.

2. Physical strength training:　And has been actively implementing each team will speak. Tended to change as the transition to middle school is an emphasis on speed training and strength from the endurance ranninng.

3. Other lifestyle guidance: Family road trip supporting parents, cooperation and social gatherings, we have actively, including leaders, dietary advice and cooperation, awareness and concern about nutrition and not say high.

4. Medical check:　More likely to implement only the injured player, and efforts have been made on a daily basis could not say. This trend is particularly pronounced low-grade, low awareness of the facets of the importance of medical check during the growth of important players.

Key words: Golden Age, Basketball, Teaching
キーワード: ゴールデンエイジ，バスケットボール，指導法

1）山形大学地域教育文化学部　　2）弘前大学教育学部　　3）弥富高等学校

Ⅰ．はじめに

（財）日本オリンピック委員会（JOC）は，2001年に10年間でオリンピックのメダル倍増を目指して国際競技力向上戦略（いわゆるゴールデンプラン）を提起した．そこでは特に低年齢層の競技力強化がうたわれている．その後，特に水泳競技等の個人種目の一部では一定の成果が認められるものの，バスケットボールについては目だった成果が認められてなく，世界，アジア諸国に対しても劣勢を余儀なくされている．

わが国のバスケットボールの指導法に関しては，これまで児童生徒の内容も含め，数多くの研究[5-6]も発表され，また指導書・刊行誌等も発行されており[9-10), 23-24]，国内でも強化活動も進められている．特にそれらの事業の一つに，日本バスケットボール協会では，2001年より「エンディバー計画」と称して，「競技力の向上のためには低年齢層から正しい技術や知識を指導する必要がある」という認識のもとで，全国規模における，バスケットボール一貫指導という指導法を含め指導内容の指針を提示している．

ところで，バスケットボールにおける競技への参加は，いわゆる「ミニバスケットボール」と称する小学生（はやくて3年生）から始まる．近年，小学生から中学生の時期を「ゴールデンエイジ」[注1)]と呼ぶようになってきた．その理由はスキャモンの発育曲線から明らかなように，人間の神経系の発達は生まれてきてから5歳位の間に約80％の発達をとげ，12歳頃にはほぼ100％に達するからであると言われている．この事を勘案すると「ミニバスケットボール」に参加している児童，中学生の指導がいかにこの時期に重要であるか明らかであろう．「エンディバー計画」の方針になんら異論を訴える点は見あたらない．しかしながら指導者の視点からすると，指導を受けている児童，生徒がどのようにその指導を受け止めているのか，体験的には分析はしているものの，一貫性という意味においては，その共通理解を得るほどまで定かではないと言えよう．わが国がより指導の向上，あるいは指導運営の効率などを考えるのならば，それらの観点を踏まえたうえで指導にあたる必要性があると思われる．

そこで本研究では，現在のジュニアスポーツ指導の課題や問題指摘[1-4), 11-14]のある中で，ゴールデンエイジをテーマにした，バスケットボール競技について児童・生徒に対するスポーツ指導の現場と現状を検証しながら，今後のゴールデンエイジにおけるバスケットボール指導のあり方等について検討するための資料を得ることを目的とした．

Ⅱ．研究方法

東北地区における小学校と中学校のバスケットボールチームの中から，主な代表チームを選び，そこでの直接指導を行なっている指導者（コーチ）を対象とし，各チームの年度計画を考慮に入れ，年2回のアンケート調査を設定，指導者側から見た実際の指導における指導内容や，そこに関わる環境などの指導現場の状況について調査された．

1） 調査期日

調査の期日は，下記の時期に行なわれた．

ⅰ） 第1時期（1回目）
平成20年7月初旬～8月初旬（中学校全国大会県予選前）

ⅱ） 第2時期（2回目）
平成20年11月初旬～12月初旬（ミニ全国選抜大会県予選前）

ⅲ） 第3時期（3回目）
平成21年6月初旬～7月初旬（中学校全国大会県予選前）

ⅳ） 第4時期（4回目）
平成21年11月初旬～12月初旬（ミニ全国選抜大会県予選前）

2） 対 象

調査の対象にされたのは，青森県，山形県，宮城県の各3県のミニバスケットボールチーム（以降ミニと表記）と，中学校のバスケットボールチームから男女それぞれ5～8チームが選ばれ，チームで直接指導にあたっている人物に依

頼を行なった.

内訳については，第1時期，ミニから男女28チーム，中学から男女37チームで当初65チームが選ばれた．その内58チームの回答（回収率89.2%）が得られた．また第2時期の調査では，1回目の65チームにさらに16チームが追加され，ミニ男女36チーム，中学男女45と，全81チームに実施された．その内62チームからの回答（回収率76.5%）が得られた．引き続き2年目の調査として第3時期が前年度同様にして調査が行なわれた．52チームの回答（回収率64.1%）が得られた．また第4時期では46チームから回答（回収率56.7%）が得られた．回数を重ねる毎に回収率も低下している傾向が見られた．同じアンケート内容と，対象が同一人物のために起こる同様の回答が増え，中には無回答の回答も見られた．それらの状況を踏まえ，最終的には調査実施の第1時期から第4時期まで回収されたものから，指導者の1回目に相当する回答を基にして検討処理された.

集計処理されたチームは，ミニバスケットチームから女子（16），男子（20）を合わせた36チーム，中学校チームから女子（23），男子（22）を合わせた45チームとし，4グループ毎に集計が行なわれた.

3) アンケートの内容

調査の内容については，小学校と中学校には同様の質問内容を作成，アンケート調査の内容については指導理念，指導方法，トレーニングの実施，さらには生活面に関する，メディカル・チェックなど5つの項目に分け，設問33項目が設けられた．その得られた回答結果の中から特徴の見られた21項目が報告された.

Ⅲ．結果と考察

1） 指導方法について

1. 表1は指導者の指導理念（自由記述）について回答結果を示したものである．ここではミニ（小学生）の男子女子の指導者が共に技術レベルなどのスキル的な項目よりは，「人間教育」や，「青少年の健全な育成」，「バスケットの楽しさ」，「礼儀」，「マナー」，「生活習慣」などと，いわゆる道徳的なものや，社会性を尊重した内容に関係する言葉の回答が多く示された．また中学生の指導者についても，ミニと同様に，道徳的項目や社会性に関係のある項目が多かったが，その一方では，「1- on -1」や「リーダーシップ」，「勝利」，「競争心」，あるいは「競技力」など，スポーツ競技に関する具体的な用語が挙げられている傾向が見られた.

つまり，小学生と中学生との発達や成長の異なった評価に伴って，指導者における選手の競技レベルおよび，指導受容力[19]の違いに対応した指導意識や目標などの違いが反映している.

2. 図2（以降ミニと中学生の2つのグラフを表示）は指導における現在の指導目標（2項目選択），についての回答結果を示したものである．ミニの女子では，「仲間づくり」が43.8%と最も多い割合を示した．また「体力の向上」，「礼儀・しつけ」，「技術力の向上」の3項目に同率の高い割合を示した．男子も同様の傾向が見られたが，その中でも特に「体力の向上」が多い割合を示しており，次に「技術力の向上」，「仲間づくり」の順に挙げられ，他の項目に対しても分散している傾向の回答が得られた．中学校では，女子の場合，「競技力の育成」

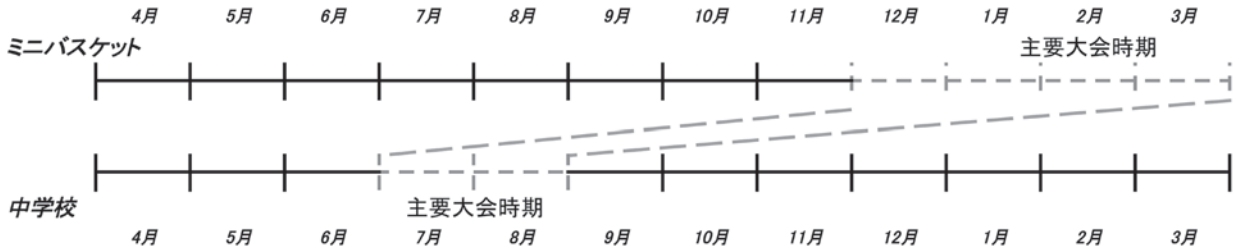


図1　ミニ，中学校の1年間における主要大会時期

ミニ・女子チーム
指導理念
シュートの魅力，人間教育
基本を大切に，バスケを続けられる能力
楽しくゲームが出来る，相手の尊重
バスケが楽しくなるように
青少年の健全な育成
仲間作り，楽しむこと
自主性の育成・尊重の補助者として
楽しさ，団結力の素晴らしさ
元気に明るく
楽しさ，人間的成長
スポーツを楽しむこと
子どもの基礎を作る，将来性
楽しさ，好きになる
社会性・人間形成・忍耐力・基礎力
努力することの大切さ
特になし

16チーム

ミニ・男子チーム
指導理念
礼儀・チームワーク，感謝の心を身につける
やれば出来る，努力はうそをつかない
シュートの魅力，人間教育
楽しむこと，基本技術の成果の喜び
楽しくゲームが出来る，相手の尊重
バスケが楽しくなるように
青少年の健全な育成
仲間作り，楽しむこと
心身の成長
生活習慣，礼儀，マナー，基本技術
素直，挨拶，マナー，仲間
子ども教育，コミュニケーションの努力
勝負の喜びと悔しさ，礼儀
楽しさ，人間的成長
楽しさ，好きになる
社会性・人間形成・忍耐力・基礎力
運動能力の向上，人間関係の形成
特になし（3チーム）

20チーム

中学・女子チーム
指導理念
人格の形成
人間教育
1on1のシンプルバスケ
ほめる，認める指導
個人能力の育成
人間形成，人づくり
協力，リーダーシップ
教育，競技力，人間形成
人間形成・スポーツマン
真剣な取り組み方，姿勢を育てる
人間性
人格形成・人間作り・競技力の向上
夢や目標に挑戦する心，態度の育成
人作り，からだ作り，ボディーバランス
楽しさ，努力の先に勝利がある
立派な中学生を期待して
心と体を鍛える
生き方の育成
良い中学生になってもらいたい
仲良く活動できる
競技の特性を理解し，楽しさを覚えさせる
特になし（2チーム）

23チーム

中学・男子チーム
指導理念
人格の形成
一生懸命
自主性を育てる
人間形成
勝利・協力・競争心
競技力・人間性の育成
人間形成・清々しく魅力ある中学生
一生懸命努力する心
人間性・社会人としての基礎
スポーツマンシップ
真剣な取り組み方，姿勢を育てる
夢や目標に挑戦する心や，態度の育成
人づくり・スポーツマンシップ
楽しさ・努力の先に勝利がある
立派な中学生を期待して
生き方の育成
人間形成
楽しく強くバスケットを続ける気持ち
諦めることは負けである
礼儀・マナー
チャレンジ精神

22チーム

表１　指導理念

が最も多い割合を示し，次に「学校教育」，そして３番目には「礼儀・しつけ」の順で挙げられた．一方の男子も女子同様の傾向が示されているが，特に「競技力の育成」には77.3％と，４グループ中最も高い割合が示され，中学生男子の特徴として示された．次に挙げられたのは「礼儀・しつけ」で50.0％，続いて「学校教育」と「技術力の向上」が18.2％とそれぞれ同じ割合で示された．

ここでは，ミニの指導者が「体力の向上」・「技術の向上」を挙げる一方で，「仲間作り」や「礼儀・しつけ」を重んじている傾向であるのに対し，中学の場合では，男女共に競技力を高めるための指導に力を入れていることが窺える．小学生のように低学年の技術力や能力全般を考慮した場合，まだ充分な力が備わっているとは言いがたく，その成長過程の中で徐々に競技に関する専門的技術の設定を考えて行かなければならない事を意味しているものと言える．また，中学生女子については，「学校教育」が２番目に取り上げられており，小学生と異なる一つの特徴といえよう．中学生男子との比較では，学力に関する教育観と，生活面での礼儀やしつけに関する道徳観などにおいて，指導の観点から若干の違いが見られた．

3.　図３は選手に対する評価基準（１項目選択）についての回答結果を示したものである．ミニの女子は，「その他」の項目に31.3％と最も多い割合を示したが，この項目に関しては中学男子を除く３グループに高い割合が示された．次に挙げられた項目は「努力・根気」であった．また「技術力」，「礼儀」，「素直さ」，「快活さ」など４項目に分散し12.5％と同率の値が示された．男子については，「礼儀」が35.0％と項目中最も多い割合を示し，次に「その他」が20.0％，そして「技術力」，「努力・根気」が15.0％と同率の値で示された．中学校の場合では，女子は「礼儀」，「努力・根気」，「その他」の３項目に多い割合が示された．男子では「技

術力」が最も多い割合を示し，全項目と比較してもかなりの差が見られた．2番目に多かったのが「その他」で，その後に「礼儀」,「努力・根気」,「頑張る力」同率で挙げられた．

ここでは，中学男子を除く4グループが「その他」,「努力・根気」,「礼儀」などの人間性及び精神的な要素の項目が主な回答であったに対し，中学男子のみ「技術力」という回答が多く示された．このことは，中学男子が3グループの中でも特に競技力の指数となる身体的能力や技術力などにおいて，最も強く発揮されるグループであり，成長に伴った指導法の対応の変化が伺える．

4. 表2では試合での選手の評価基準（自由記述）の回答を示したものである．ここでは，前述の回答に対する補足を示している内容といえる．全体的な比較では，ミニ，中学の男女共に「練習で出来ているプレーが，実際の試合で出来ているか」という練習の成果を測る言葉が多く挙げられている．その中でも一つの傾向としては，ミニから中学になるにつれ，多様かつ

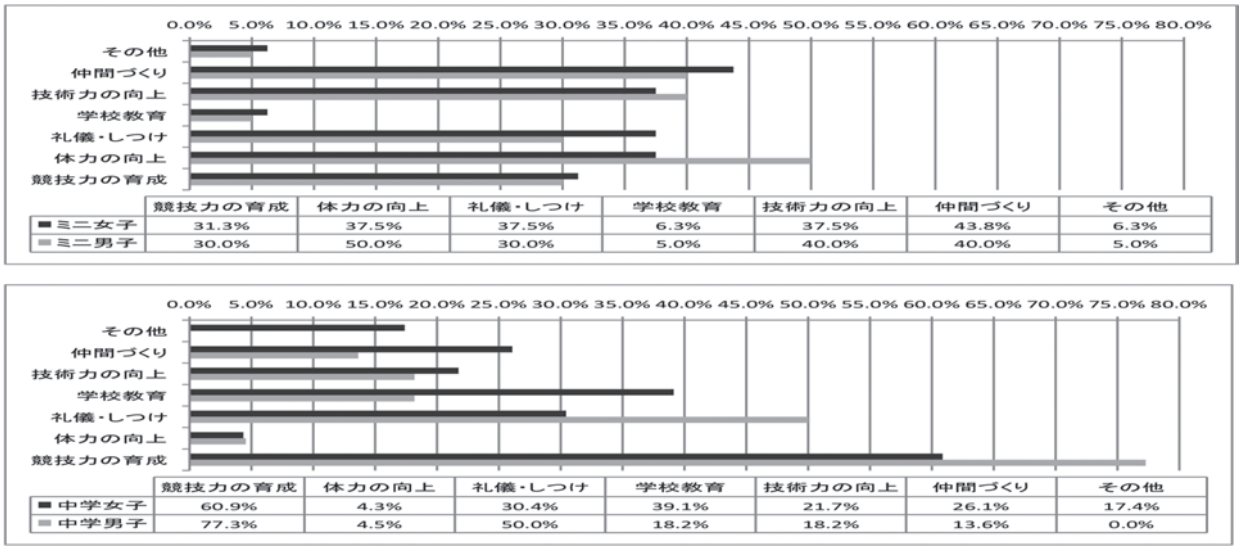


図2　指導目標

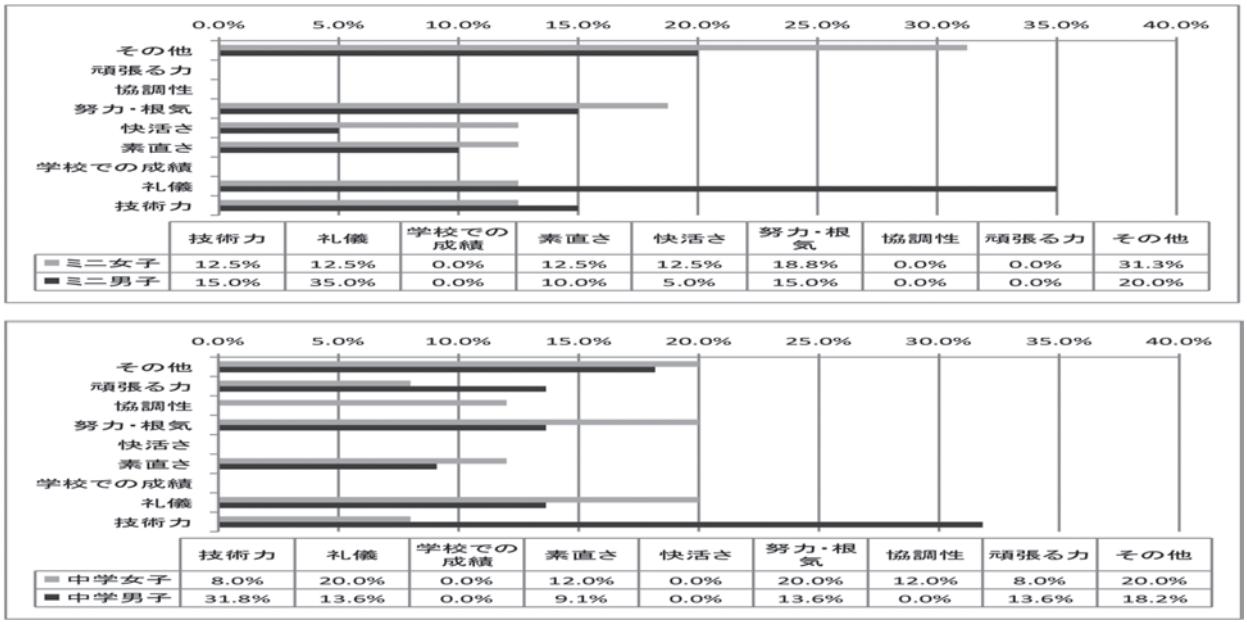


図3　選手に対する評価基準

詳細な表現が多くなっている点と，特に中学男子では専門的用語や，競技性が強く表れている言葉が多く挙げられている傾向があり，表現により具体性を持った内容が示されていることが窺えた．

5. 図４はクラブ活動に対する満足度の回答を示したものである．ミニの女子は「どちらとも言えない」が 37.5％と最も多い割合を示した．「少し満足」が 31.3％で２番目の値であり．2 項目で過半数の割合を占めた．男子も「どちらとも言えない」が 35.0％で最も多い割合を示し，「少し満足」，「少し不満」の２項目に 25.0％と同じ値が示された．

中学の女子では，「少し満足」に 39.1％と最も多い割合を示し，「どちらとも言えない」は 30.4％と次の値を示し，２項目で７割近くの値を占めている．また男子では，「少し満足」が 59.1％と過半数を超える割合を示している．次いで「非常に満足」と「少し満足」の２項目が同率で挙げられた．ここで全体の傾向を見ると，ミニの指導者が中学の指導者に比べ，ややチームに対する満足度が低い傾向が示されている．その理由として考えられることは，勿論，競技レベルを始めとする，種々の問題もさることながら，年齢差から起こる能力的な要素，関係などのいろいろな問題や課題が考えられる．

6. 図５は満足していない点（複数選択可）についての回答を示したものである．ミニの女子では，「競技レベル」が 25.0％と最も多い割合を示した．次に多かったのが「礼儀」，「その他」の２項目が挙げられた．男子の方は，「練習時間」と「組織力」，「その他」の３項目に 20.0％と最も多い割合を示した．

ミニ・女子チーム
試合の評価基準
チームの目標を決め，その達成度
目標設定に対する達成度
公式戦は勝敗，練習試合は内容と達成力
練習したプレーの出来映え
個人の能力に合わせた技術の追求
技術力
やる気・元気・一生懸さ
練習の成果・積極性
各個人の頑張りと努力度
ミスの少なさ・積極性
練習の成果
自分を試す挑戦度
自分達のプレーの出来映え
練習の成果と努力と達成度
練習の成果と努力

16チーム

ミニ・男子チーム
試合の評価基準
内容（得点までの過程・練習内容の発揮）
ルーズボール・ディフェンスの頑張り
チーム目標の達成度
目標設定への努力度・達成度
個人技術・チームプレーの出来映え
個人個人，普段の練習のゲームでの発揮度
練習したプレーの出来映え
個人の能力に沿った様々な技術の追求
技術力
練習の出来映え・努力と成果
練習成果の発揮と，最後までの頑張り方
最後までゲームに取り組み方
チームの課題の成果と努力
練習してきた内容のゲームでの成果
ミスの少なさ・積極性
練習でやってきたプレーの出来映え
練習目標へ努力度と，出来映え
練習してきた事の出来映え
特に決めてない（2チーム）

20チーム

中学・女子チーム
試合の評価基準
練習したことが，出来ているかどうか
チームの約束事を，最後までやりきる集中力
チームで理想とするプレーが出来たか
ゲームの目標や，やるべき事の達成度
ディフェンス力
課題達成の評価・ゲーム内容
苦しい場面での頑張り，積極的な攻防，シュート（ルーズボール・ディフェンス・声だし）
練習してきた技術の達成度と徹底
チームが練習でしてきたことの達成度
意図のある動きの積極的な表現力
練習成果の成否
個人・チームの持ち味を生かす戦い方
力が最大限に発揮しているか
勝敗ではなく，内容
練習成果と，練習に裏づけされたナイスプレー
1ゲームを通してどれだけ走れるか
練習成果と勝つための努力と判断力
目標に対する挑戦
練習成果
練習成果と挑戦
練習成果と積極性・努力
プレーの結果に裏付けられる頑張り・積極性
特に決めていない

23チーム

中学・男子チーム
試合の評価基準
練習成果の出来映え
練習したことの，体得と発揮
チームディフェンスの頑張り，走力
基本の遵守，協調性，かけひき，対応能力
選手の技量別に見た，能力の発揮度
チームの攻撃と防御毎の貢献度とバランス
練習成果を通し，ミスを問わず積極性を見る
チームの約束の努力・達成度・ひたむきさ
チームの普段の練習内容の成果
意図のある動きの表現力・積極性
個人個人の目標の達成度
練習での能力評価と試合での発揮度の差
勝敗ではなく，内容
練習成果と，裏づけされたナイスプレー
1ゲームを通した走力
チームの決めた目標に対する挑戦度
試合に対する目標の達成度
試合の結果よりも内容
先ずは勝つこと，次に試合内容
チームで勝利に向かう頑張り
全体的な対応能力

22チーム

表２　試合での選手の評価基準

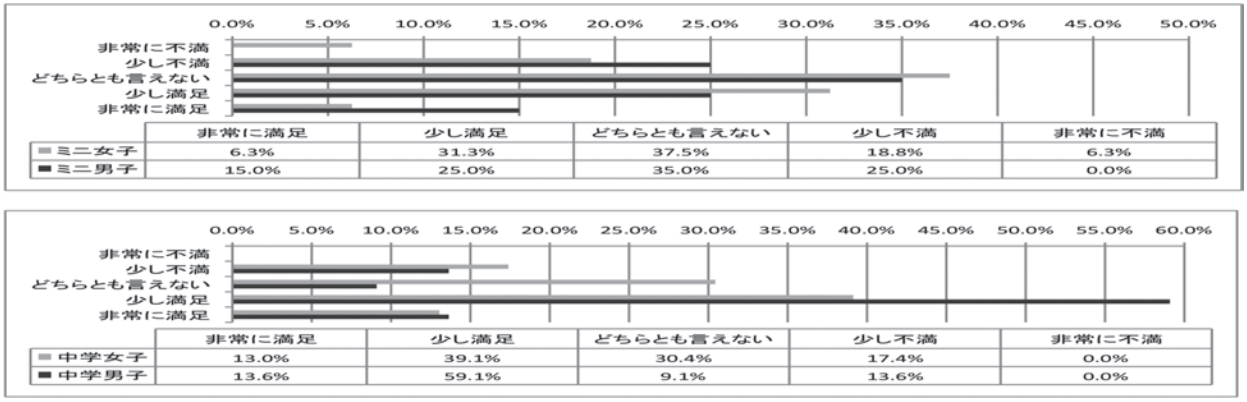


図４　クラブ活動に対する満足度

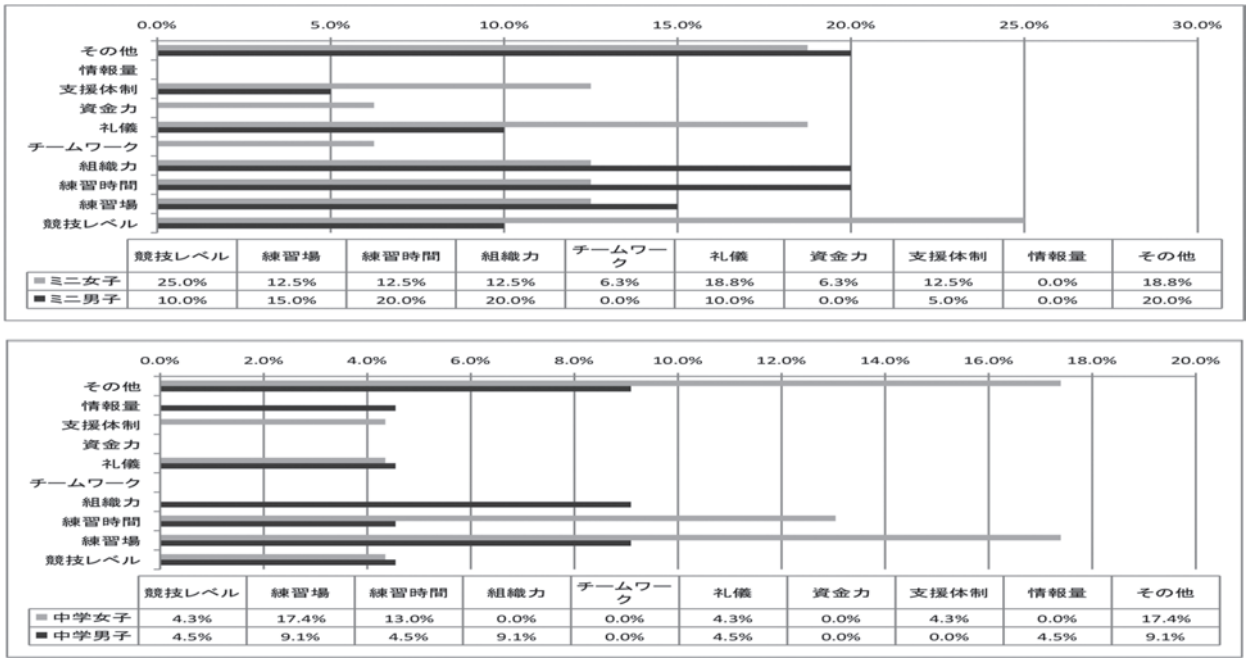


図５　満足していない点

中学の女子では「練習場」と「その他」の２項目に17.4％と最も多い割合を示し，次の「練習時間」では13.0％と３項目で殆どの割合を占めていた．男子では，「練習場」，「組織力」と「その他」の３項目が9.1％と最も多い割合を示した．また他のグループには表れなかった「情報量」を挙げていた．

ここでは，４グループ全てに割合が多かった「その他」については，ミニ男子の解答にあった「組織力」にも関係しているが，例えば中学の女子場合は「選手が集まらず，チームが作れない・・・・」や，「練習日に選手がそろわない」，などのチームおよび練習活動が成り立たないという理由や説明があった．「組織力」の解釈の仕方を考慮すると，スタッフ及びチーム全体の構成する人数確保などに苦労している状況が窺われる．この点については，現代の社会問題となっている「少子化」の影響がここでも影響し始めていることを認識していかねばならない．特にチーム・スポーツを代表するバスケットボール競技は，明らかにその対象となっていることが懸念された．全体的にみて，練習場や時間の確保，組織力の充実などに苦労をしている点が指摘された．

7.　図６は具体的に練習場などの施設の提供や，生徒達の学習する活動拠点となっている現場である直接選手との関わりを持っている学校

との関係である，いわゆるクラブへの理解度についての回答結果を示したものである．ここでは，ミニの男女が「理解している」と，「どちらとも言えない」の2項目がほぼ2分している回答に対し，中学の男女では「理解している」が過半数以上の回答を示した．2つの現場では，活動に対し理解度に差のある点が言えるが全体的には，おおよそ「理解していただいている」と受け止めていると言ってよいであろう．

尚，前述の項目（図5）で回答であった「練習場」,「練習時間」,「組織力」などの内容との関係を考慮すると，施設の提供の仕方や条件，各現場での教育活動や運営に関する規則的な面などを行う上で1つの壁となっている点も指摘された．また指導者の就任の仕方（図20）が中学校の場合は現場の顧問教員[23]が多い傾向に対してミニの場合は，「外部コーチ」というケースが多いために，学校側とのコミュニケーションの取り方，時間的方法的等の点について，少なからず運営について影響している．

8.　図7は練習中で大切にしている項目（運動能力・技術面）の回答（3項目選択）結果を示したものである．ミニの女子では，「フィールドゴール」が62.5％と最も多い割合を示し，次に「スピード」が56.3％と挙げられていた．また3番目の値は「ディフェンス力」の43.8％が挙げられた．男子も，女子同様「フィールドゴール」が55.0％と最も多い割合を示した．次に多かったのは「パス＆キャッチ」の項目で40.0％，さらに「ディフェンス力」と「スピード」が35.0％と同率で挙げられた．

中学の女子になると最も多く示された項目は「ディフェンス力」の43.5％であった．次に挙げられたのは「スピード」の39.1％，3番目には「フィールドゴール」と「パス＆キャッチ」が34.8％の同率で挙げられている．ここでは，挙げられた項目に大きな差が見られなかった．男子では，「スピード」が45.5％と最も多い割合を示しており，2番目に多かったのが「パス＆キャッチ」と「ディフェンス力」の36.4％の2項目であった．前の3グループが全て「フィールドゴール」を挙げているのに対し，ここでは4番目に挙げられており一つの変化として窺うことが出来た．また「フィールドゴール」は，レイアップシュートを含むゴールに近いエリアでのシュートを意味しており，シュート技術の基本として扱われる技術である．ミニから中学へと進む過程で，段階に応じて割合が低くなっていることが窺える．また高い割合ではないが「ドリブル」の項目についても同様に，ボール操作（コントロール）の基本技術の一つとして扱われており，初期の段階より導入されながらも段階を経ては徐々に割合が低くなっていることも窺える．このような指摘は「ゴール下シュート」と「フットワーク」を始め，「ルーズボール」,「リバウンド」，更には「体力」等の項目にも見られる．また男女別に比較すると，前述と同じようにミニより中学，女子より男子という成長過程に見る身体的な能力の差があるように基礎的な内容と応用的なものとの違いが見られた．

尚，スリーポイントシュートについては，ミニバスケットボールではルール上採用されてお

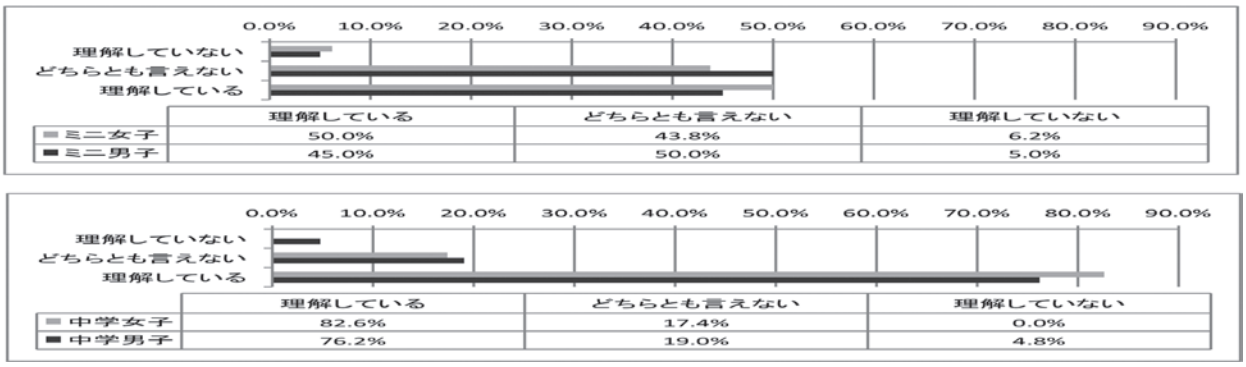
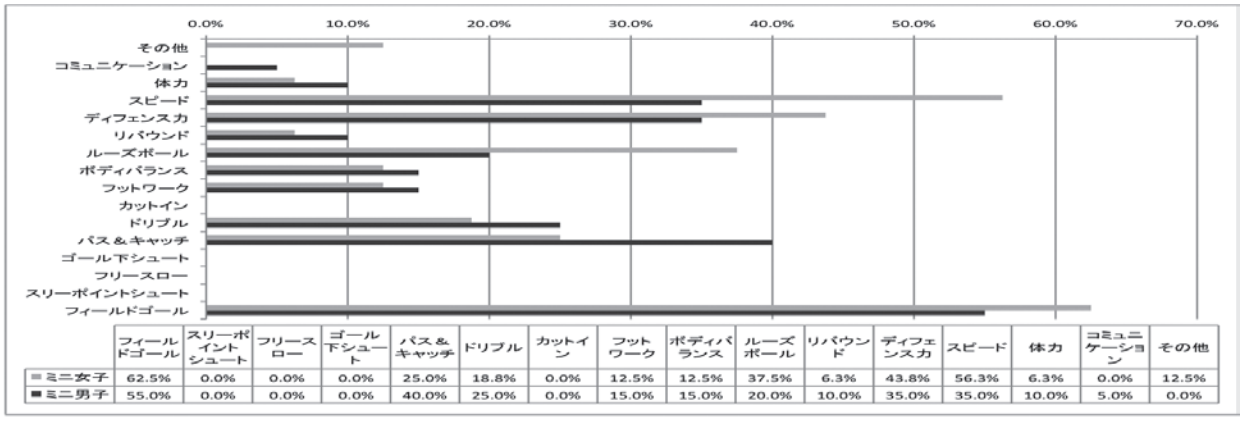
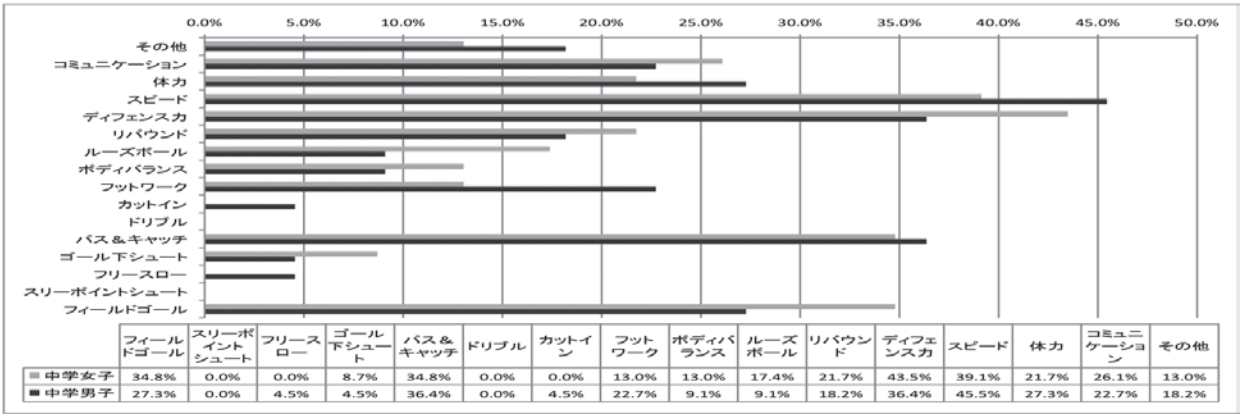


図6　学校側のクラブへの理解



	フィールドゴール	スリーポイントシュート	フリースロー	ゴール下シュート	パス＆キャッチ	ドリブル	カットイン	フットワーク	ボディバランス	ルーズボール	リバウンド	ディフェンス力	スピード	体力	コミュニケーション	その他
ミニ女子	62.5%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	18.8%	0.0%	12.5%	12.5%	37.5%	6.3%	43.8%	56.3%	6.3%	0.0%	12.5%
ミニ男子	55.0%	0.0%	0.0%	0.0%	40.0%	25.0%	0.0%	15.0%	15.0%	20.0%	10.0%	35.0%	35.0%	10.0%	5.0%	0.0%



	フィールドゴール	スリーポイントシュート	フリースロー	ゴール下シュート	パス＆キャッチ	ドリブル	カットイン	フットワーク	ボディバランス	ルーズボール	リバウンド	ディフェンス力	スピード	体力	コミュニケーション	その他
中学女子	34.8%	0.0%	0.0%	8.7%	34.8%	0.0%	0.0%	13.0%	13.0%	17.4%	21.7%	43.5%	39.1%	21.7%	26.1%	13.0%
中学男子	27.3%	0.0%	4.5%	4.5%	36.4%	0.0%	4.5%	22.7%	9.1%	9.1%	18.2%	36.4%	45.5%	27.3%	22.7%	18.2%

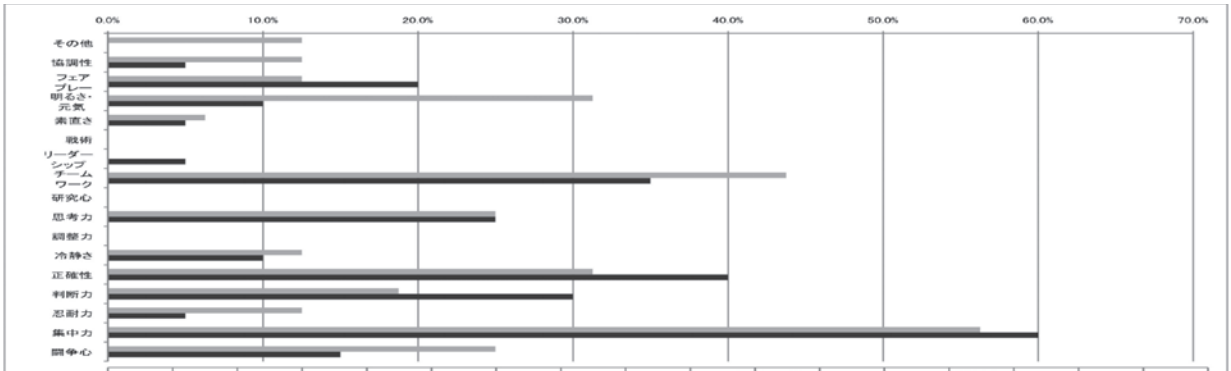
図７　練習で大切にしている項目（運動能力・技術面）

らず，比較の対象にはならなかったが，ミニ中学共に回答は見られなかった．

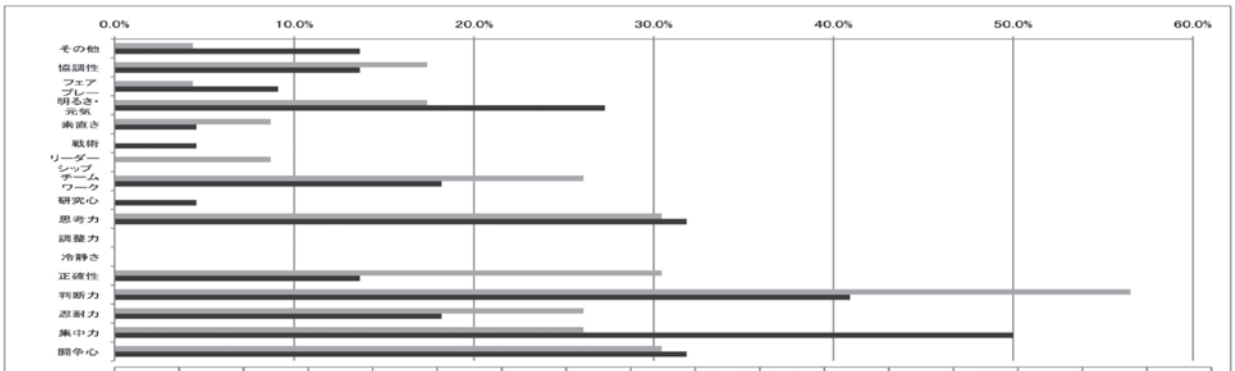
9.　図８は練習中に特に大切にしている項目（メンタル面）についての回答（3 項目選択）結果を示したものである．ミニの女子では，「集中力」に 56.3％と最も多い割合を示した．次に「チームワーク」が 43.8％と挙げられ，「正確性」と「明るさ・元気」の 2 項目とが 31.3％の同率で挙げられた．男子も女子同様に，「集中力」が 60.0％と最も多い割合を示した．続いて「正確性」が 40.0％で挙げられ，3 番目には「チームワーク」が 35.0％で挙げられた．

中学の女子では，「判断力」の 56.5％と最も多い割合が示された．続いて「闘争心」と「正確性」，「思考力」の 3 項目が 30.4％の同率で挙げられた．「集中力」「忍耐力」「チームワーク」の 3 項目の同率（26.1％）を見ても，中学の女子は各項目に解答が分散している傾向が見られた．男子の方では，「集中力」が 50.0％と最も多い割合を示し，次には女子と同様に「判断力」が 40.9％で挙げられた．また 3 番目には「闘争心」と「思考力」が 31.8％の同率で挙げられている．

ここでミニと中学の比較で見ると，ミニと中学がそれぞれ男女共に同じ傾向が見られ，同じ項目が挙げられていることが指摘された．特にミニの指導者では，はっきりと「集中力」，「チームワーク」，「正確性」の 3 項目を挙げている．中学も類似した傾向も見えるが，いろいろな項目に分散したが，中でも女子の方は，「判断力」がトップに挙げられたのに対し，男子が「集中力」がトップだった点などの違いが見えた．特に中学では，ミニには特徴に無かった「闘争心」が，男女共に上位に挙げられたことが特徴と言えるだろう．「忍耐力」，「判断力」，「思考力」等も考慮に入れれば，小学から中学への成長段階に応じた，一つの指導法における発展的な対応の変化と捉えられる．



	闘争心	集中力	忍耐力	判断力	正確性	冷静さ	調整力	思考力	研究心	チームワーク	リーダーシップ	戦術	素直さ	明るさ・元気	フェアプレー	協調性	その他
ミニ女子	25.0%	56.3%	12.5%	18.8%	31.3%	12.5%	0.0%	25.0%	0.0%	43.8%	0.0%	0.0%	6.3%	31.3%	12.5%	12.5%	12.5%
ミニ男子	15.0%	60.0%	5.0%	30.0%	40.0%	10.0%	0.0%	25.0%	0.0%	35.0%	5.0%	0.0%	5.0%	10.0%	20.0%	5.0%	0.0%



	闘争心	集中力	忍耐力	判断力	正確性	冷静さ	調整力	思考力	研究心	チームワーク	リーダーシップ	戦術	素直さ	明るさ・元気	フェアプレー	協調性	その他
中学女子	30.4%	26.1%	26.1%	56.5%	30.4%	0.0%	0.0%	30.4%	0.0%	26.1%	8.7%	0.0%	8.7%	17.4%	4.3%	17.4%	4.3%
中学男子	31.8%	50.0%	18.2%	40.9%	13.6%	0.0%	0.0%	31.8%	4.5%	18.2%	0.0%	4.5%	4.5%	27.3%	9.1%	13.6%	13.6%

図８　練習で大切にしている項目（メンタル面）

10.　図９は指導者の練習スタイルについての回答（1 項目選択）結果を示したものである．ミニの場合は男女共に「全て監督が終わりまで指導を行なう」が多かった．次に「選手に任せながら必要に応じてアドバイスをする」であった．

一方中学では，男子女子に違いがあり，女子はミニと同様に「全て監督が終わりまで指導を行なう」が多い割合を示した．男子の方は最も多かったのが「最初に方向付けをしながら最終的には選手に任せる」であった．

ここでも小学生と中学生との年齢差や性差を反映している点を覗くことが出来る．指導の現場を選手達に任せるという，ある一つの自主性を尊重した指導法と捉えてよいが，現実的に見るとそれぞれに選手の能力評価に対応した指導者側における指導スタイルの違いとなって表れていると言えよう．しかしながら全体的な傾向としては，指導者が練習の終わりまで，指導を行なうというケースが多いことが窺えた．

11.　図 10 は試合で大切にしている項目（運動能力・技術面）についての回答（3 項目選択）結果を示したものである．ミニ女子では「マンツーマンディフェンス」が 56.3％と最も多い割合を示した．次に「速攻」，「オフェンスリバウンド」の 2 項目に 50.0％の同率の値で示された．また 3 番目に多かったのが「ルーズボール」，「1- 対 -1」などであった．男子の方も「マンツーマンディフェンス」が 55.0％と項目中トップの割合を示し，女子同様の傾向を示しており，次に「1- 対 -1」が 50.0％，そして 3 番目に「速攻」の 45.0％の順で挙げられた．

中学女子でも「マンツーマンディフェンス」が 60.9％と最も多い割合を示した．次は「速攻」47.8％と「1- 対 -1」が 43.5％と続いて表れ，ほぼミニの男子に似た傾向を示していることが窺えた．男子でも「マンツーマンディフェンス

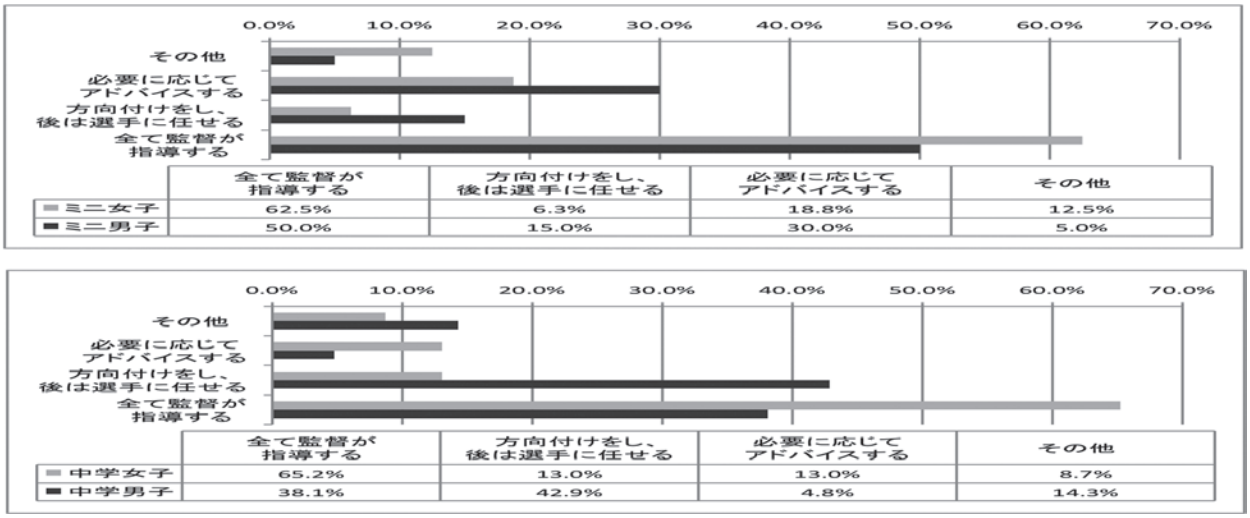


図９　指導者の練習スタイル

」が 68.2％と最も多い割合を示し，次いで「速攻」が 54.5％，「1- 対 -1」が 45.5％と 3 項目とも同じ傾向であった．

ここでは，ミニと中学の男女共に全て「マンツーマンディフェンス」が最重要であるとしている．その他に，ミニと中学を比較すると，ミニでは「速攻」と「1 - 対 -1」，「オフェンスリバウンド」に加え，「ルーズボール」などの項目が挙げられたが，中学になると低い値を示していた．「ルーズボール」は低学年（ミニ）の場合，競技レベルの不安定さから生じるミス（ターンオーバー）の頻度の問題，おのずとプレー中に起きるミスの頻度が多くなりコート内でのボールの奪い合いの能力が重要になってくるものと認識している点が窺える．しかしながらこのようなプレーは，中学でも同様に重要な基本的技術であると捕らえるべきであろうが，中学になると減少している傾向にあった．

つまり，ミニでの「ルーズボール」の奪い合いが，それに変わり中学では競技能力の上達に伴い，シュート・チャンスの回数も増え始めてくる．したがってゲーム中おのずとリバウンドボールの取り合いが増えてくることが推測される．すなわちミニや低学年クラスではよくあるコート内でプレー中に起こるミス（ターンオーバー等）に対応するためのルーズボール争いの発生頻度よりも，シュートミスの発生頻度のほうが多くなる可能性が出てくることが予想される．これらの競技内容の変化がリバウンドプレーの重要性をもたらしているものと考えられる．そのような変化が他にもオフェンス項目中心に見られる傾向にあった．

12.　図 11 は試合で大切にしている項目（メンタル面）についての回答（3 項目選択）結果を示したものである．ミニの女子は「闘争心」が 75.0％，次に「集中力」が 62.5％，そして「チームワーク」の 50.0％の順に示された．男子は「集中力」が 65.0％，次に「闘争心」が 60.0％，そして「チームワーク」の 50.0％の順であり，女子と同様の傾向にあった．

中学の女子でも，ミニ同様に「闘争心」が 65.2％と最も多い割合を示した．次に多い割合を示したのが「判断力」の 52.2％であった．続いて「研究心」の 43.5％の順であり，ミニとの違いが見られた．一方男子の方は，女子と同様の傾向が見られ，最も多い割合を示した項目が「闘争力」の 59.1％，次に「判断力」が 54.5％を示していた．3 番目の値を示したのはミニに見られた「チームワーク」が 40.9％となっていた．

全体的にみて，ミニの指導者は，男女とも共通して「集中力」，「闘争心」，「チームワーク」の 3 項目が代表している．練習の回答には示されなかった「闘争心」がここで新たに挙げられた点については，練習と試合との指導における

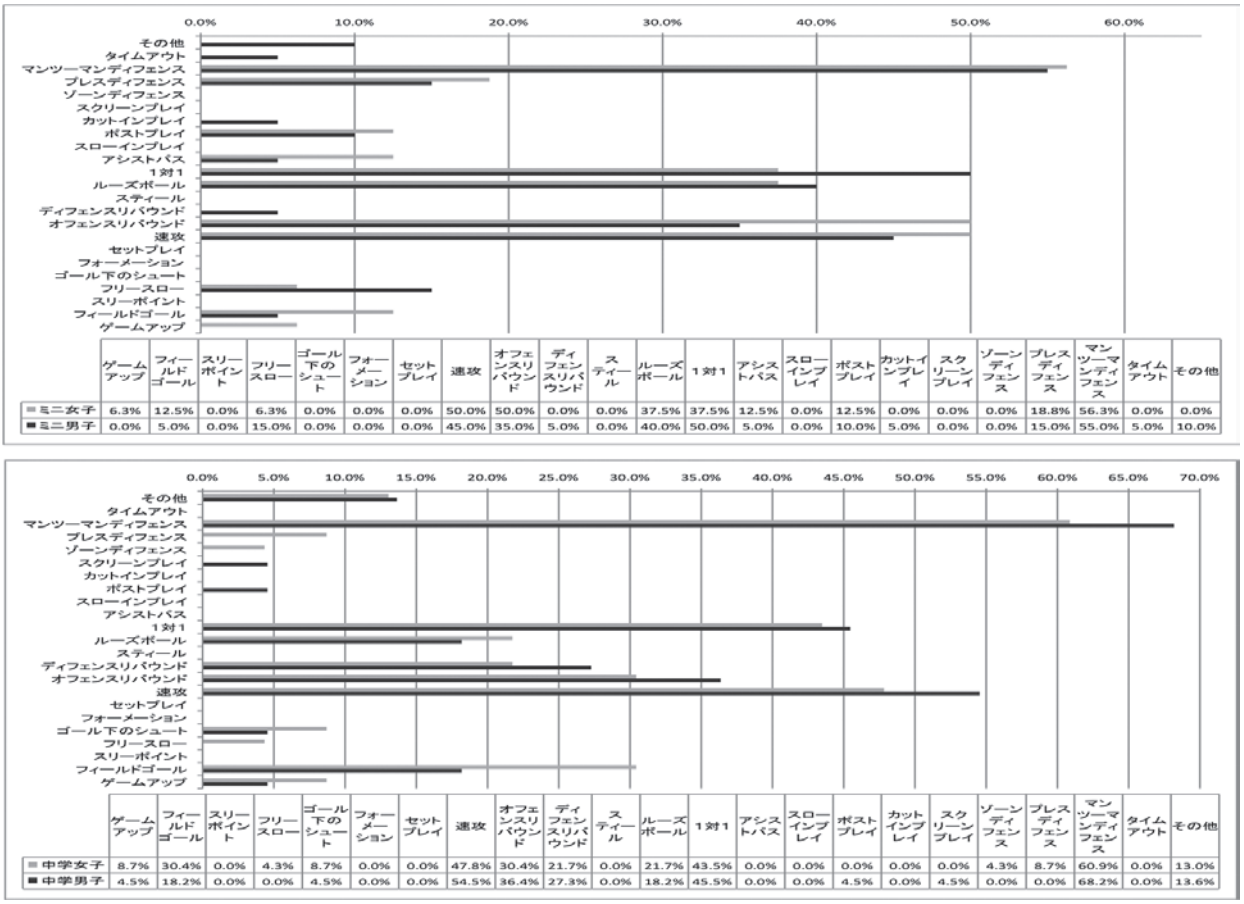


図 10　試合で大切にしている項目（運動能力・技術面）

捉え方について何らか区別をしているものと考えられる．

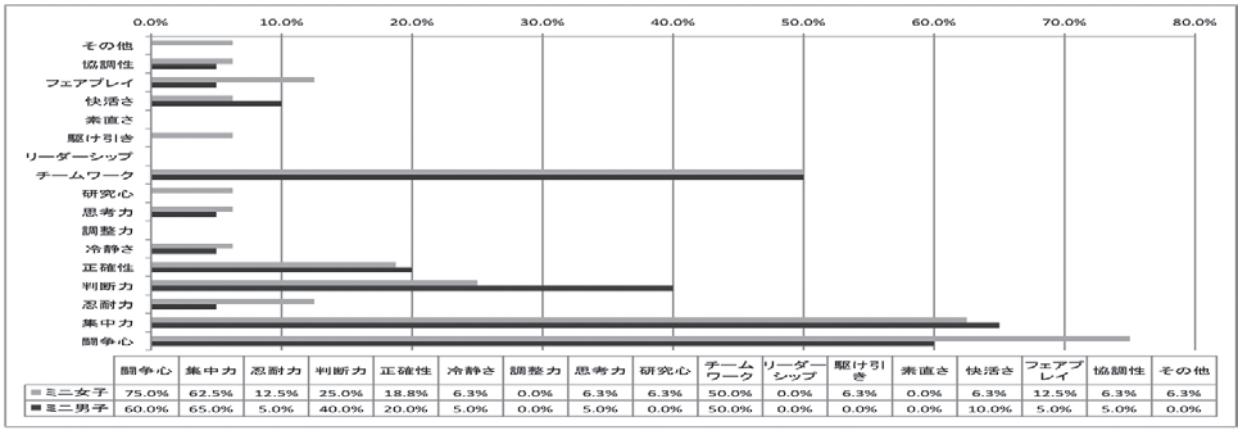
中学の指導者は，「闘争心」と「判断力」について，ミニ同様に多い値を示していたが，3番目の項目である「研究心」と「チームワーク」が女男で異なって挙げられている点について考察すると，中学生のレベルになると，成長と共に個人的な競技力が向上する時期でもあり，1- 対 -1 の攻撃スタイル多く用いられると同時に，チーム間のコンビネーションプレーなども要求される時期でもある．そんな総合的な発達過程の中で，男子チーム・女子チームがそれぞれの成長の中で，集団スポーツ且つボール・ゲームの特性とも言うべき種々のプレーについては，指導者の立場で賛否両論である．

チームのレベル差は別にして，チームプレーをマスターする過程において，それなりの対応技術や知識能力が必要となってくることが予想される．ここで表わされた「研究心」はそういう意味で，もともと女子に比べ運動能力が勝っている男子では，どちらかというと個人能力から入る傾向が強いといえるであろう．逆に女子チームの場合は，個人と言うよりはむしろチームプレーに重きを置きながら，お互い助け合いながら個人技能の向上を狙って行く傾向が強いと言える点が，微妙に影響している事が指摘された．

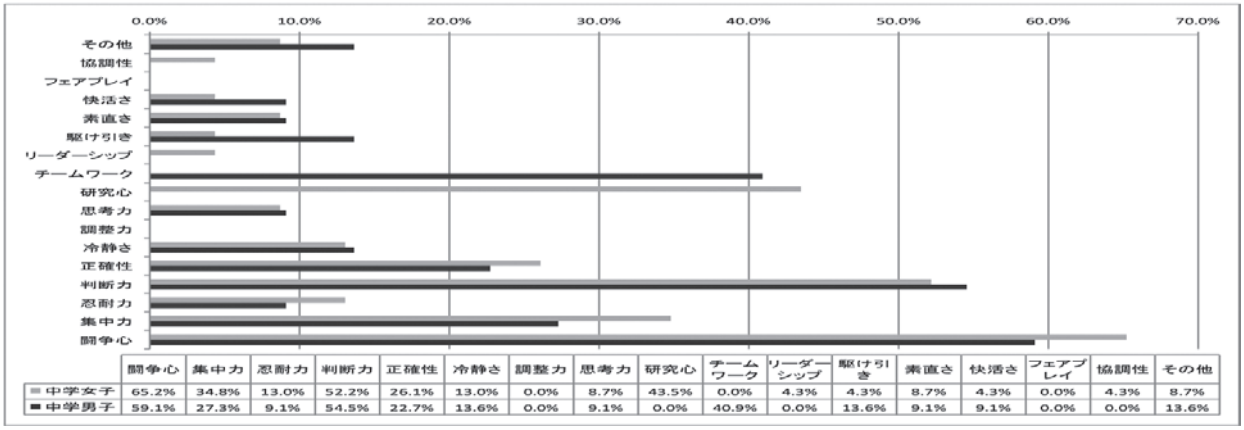
したがってミニと中学女子の場合「チームワーク」あるいは技術的要素（コンビネーションプレー）として捉える場合とに 2 分され，解釈の仕方 1 つで回答が異なって来るという見方が論点となった．

2）トレーニングについて

1.　図 12 と図 13 は練習プログラムの中で，体力トレーニングの実施状況と，その目的についての回答（複数選択可）結果を示したものである．ミニの女子が「やっていない」が 43.8%



	闘争心	集中力	忍耐力	判断力	正確性	冷静さ	調整力	思考力	研究心	チームワーク	リーダーシップ	駆け引き	素直さ	快活さ	フェアプレイ	協調性	その他
ミニ女子	75.0%	62.5%	12.5%	25.0%	18.8%	6.3%	0.0%	6.3%	6.3%	50.0%	0.0%	6.3%	0.0%	6.3%	12.5%	6.3%	6.3%
ミニ男子	60.0%	65.0%	5.0%	40.0%	20.0%	5.0%	0.0%	5.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	10.0%	5.0%	5.0%	0.0%



	闘争心	集中力	忍耐力	判断力	正確性	冷静さ	調整力	思考力	研究心	チームワーク	リーダーシップ	駆け引き	素直さ	快活さ	フェアプレイ	協調性	その他
中学女子	65.2%	34.8%	13.0%	52.2%	26.1%	13.0%	0.0%	8.7%	43.5%	0.0%	4.3%	4.3%	8.7%	4.3%	0.0%	4.3%	8.7%
中学男子	59.1%	27.3%	9.1%	54.5%	22.7%	13.6%	0.0%	9.1%	0.0%	40.9%	0.0%	13.6%	9.1%	9.1%	0.0%	0.0%	13.6%

図 11　試合で大切にしている項目（メンタル面）

で最も多い割合を示した結果の他は,「時々やっている」がミニの男子は 40.0%，中学男女も共に最も多い割合を示した. 特に中学の男女では，回答の過半数を占める割合を示しており,「いつもやっている」を含めると殆どのチームが何らかの時間を利用して実施していることが窺える．全体的には，少なからずスポーツ活動におけるコンディショニングの必要性を認識していると言えよう.

次にトレーニングの目的に関する結果については（図 13)，全体的には「持久力の向上」と「スピードの向上」の 2 項目に高い割合を示す傾向が示された．また中学の男子は，他に「筋力の向上」を挙げているのに対し，女子は「パワーの向上」という回答を得た．それぞれにプレーに結びつつけようとする意味があるようである.

つまりここでは，ミニという低学年の指導では主に持久力的要素を養うための長距離ランニングなどの時間を掛けた有酸素トレーニング法を取り入れている程度で，特別に専用のトレーニングマシーンの使用や，筋力トレーニングを行なっているチームはまれであった．しかし中学期をみると，身体の成長に応じて，それぞれに器具を使うなどをして強化を図っていることが窺える．また「リハビリ」の項目にも割合が増えた経過が見られた．ミニから中学になると回答がそれぞれの項目に分散している傾向が見え，トレーニングの目的が多様化してくることも窺えた．いずれにしても，これらの時期におけるコンディショニングの専門的強化の導入については，成長過程での個人差や性差など，充分に考慮に入れることが課題となっているようである.

3）生活指導・その他について

1.　図 14 はチームが家族・保護者に対する食事指導についての回答結果を示したものである．各 4 グループとも「時々実施している」という回答が多かった. 全般に女子チームよりも，

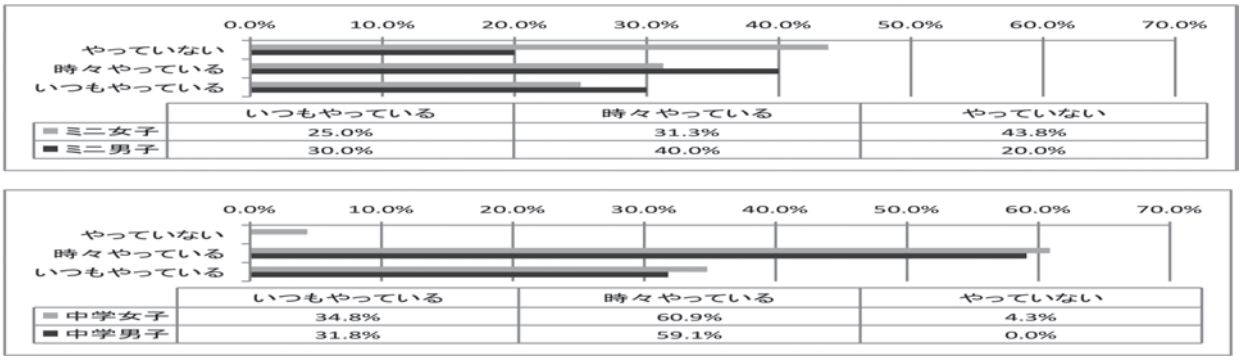


図 12　体力トレーニングの実施状況

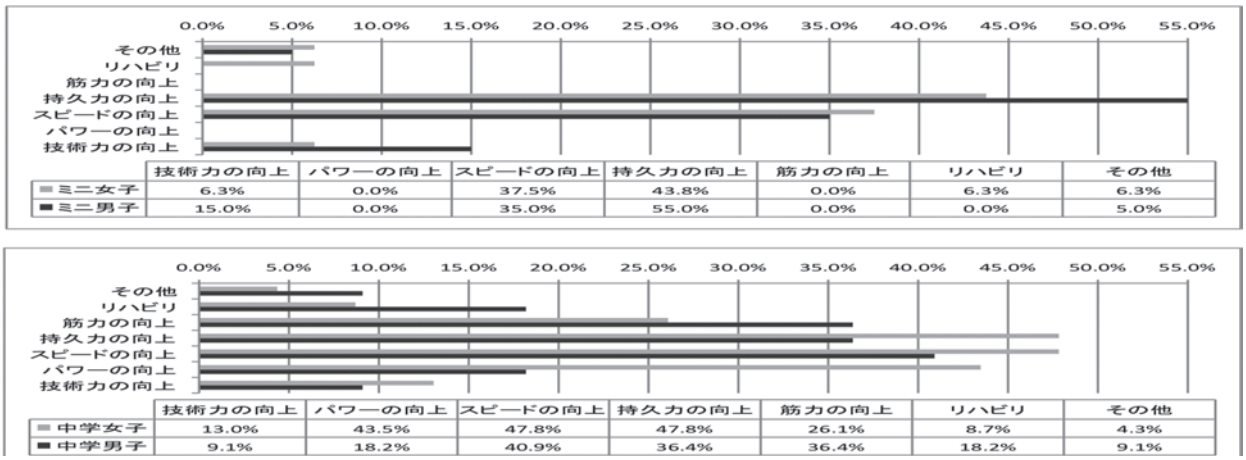


図 13　体力トレーニングの実施目的

男子チームの方が積極的な傾向が見られた．またミニの男女のチームでは「その他」の回答も多かったが，その中の理由については，定期的な合宿の折に学校などの公共施設での食事（調理），あるいは大会や遠征の際での食事やお弁当等の手配をするという普段と異なるケースがあるというものであった．低学年では父母の方々が保護者としての立場で食生活に限らず，生活全般において支援する事を当然の仕事として考えている結果である．しながら実際，栄養に関しては関心があるものの，実生活において本格的な取り組みまでには行っていないのが現実のようである．小学生との中学生との学年差によっても，保護者及び指導者間のお互いが接するそれぞれの生活の時間帯や，児童生徒自身の成長に伴う自立心，あるいは精神的な依存度などがここに反映しているといえる．

2.　図 15 は食事に関する専門的なセミナーやクリニックなどの取り組みについての回答結果を示したものである．ここでは中学の男子に「定期的に実施している」の回答が 6.7％あったのみで，それを除くと，全チームが特に実施や参加をしていない回答であった．つまり栄養，食事に関しての関心や認識は高いとはいえなかった．

3.　図 16 は選手の家族の協力に関する回答（複数選択可）結果を示したものである．全体的に多い回答があったのは，遠征移動補助と懇親会の開催などであった．遠征補助については，大会に限らず練習試合などでの遠征のための移動手段である車の手配などに協力的に行なわれているようである．また，懇親会については，大会後の反省会や懇談会，さらには祝賀会の開催についての協力が行なわれ，常に彼ら選手の活動における支援協力体制を準備していることが窺える．

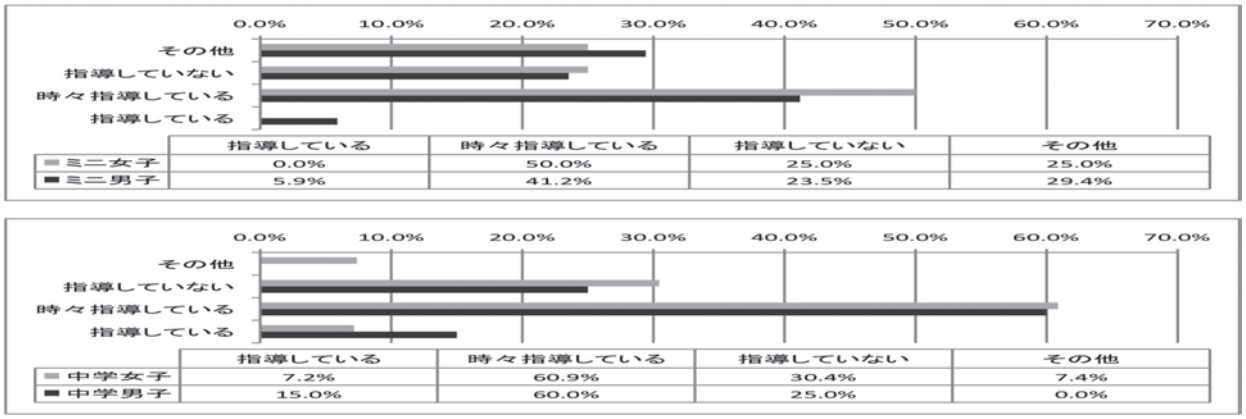


図 14　家族・保護者に対する食事指導

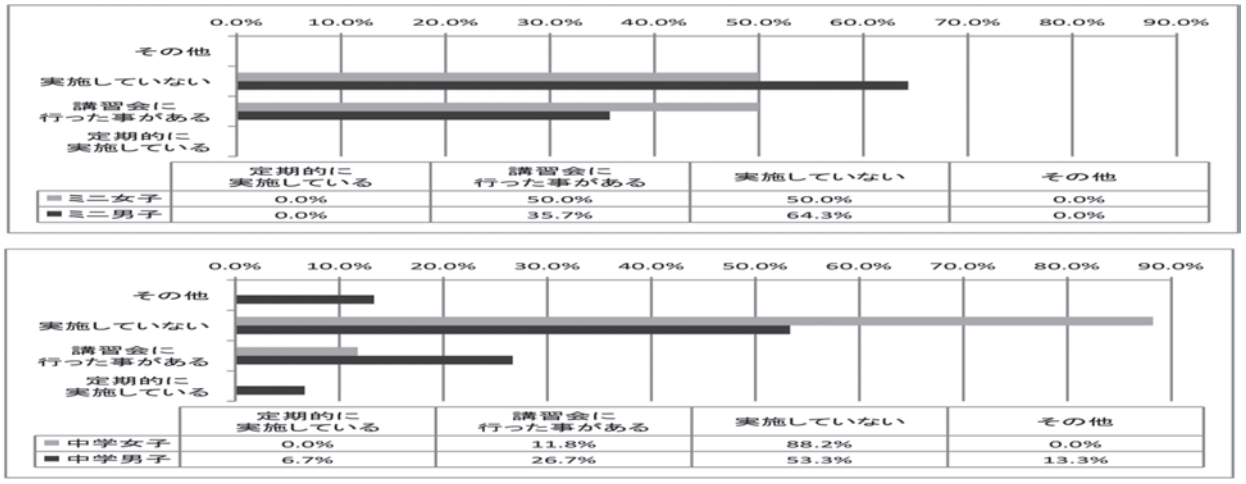


図 15　食事に関する取り組み

4.　図 17 は学業の指導についての回答結果を示したものである．ミニの女子は「家庭に任せる」と「専門家に協力してもらう」の 2 項目の回答であったが，男子では過半数以上が「家庭に任せる」が多い傾向が見られた．

中学の女子では「定期的に行なっている」に過半数を占める回答があり，次いで「家庭に任せる」であった．また男子の方では，「定期的に行なっている」が 70.0％を占める回答を見せ，小学と中学との間では学習習慣について違いが窺われた．

ここでは，ミニは「家庭に任せている」と，「専門家に協力してもらう」が代表しているのに対し，中学の方は「定期的に行なっている」が殆どであった．小学校の場合はまだ自主的な学習習慣において十分な自覚が無いことや，生活習慣の基盤づくりなどが柱となってくるため，生活時間全般を考慮すればおのずと家庭（保護者）の協力・フォローが不可欠となっているようである．さらに，指導者の職業についても考慮に入れれば，中学が直接の教員が指導者に成っている一方，ミニバスケットの場合，外部（一般の社会人）コーチという立場上の影響が考えられる．

4）　メディカル・チェックについて

1.　図 17 はチームのメディカル・チェックの実施についての回答結果を示したものである．ここではミニを始め，中学の男女チームも全て殆どのチームが「行っていない」，「必要な選手のみ行っている」の回答が殆どを占めていた．おそらくこの「必要な選手のみ ‥‥」の回答については，障害をすでに持っている選手

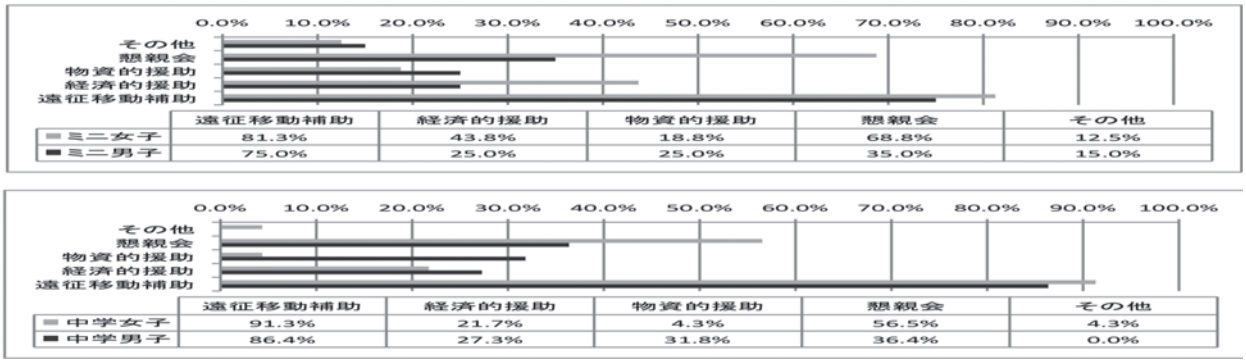


図 16　家族・保護者等の協力・援助

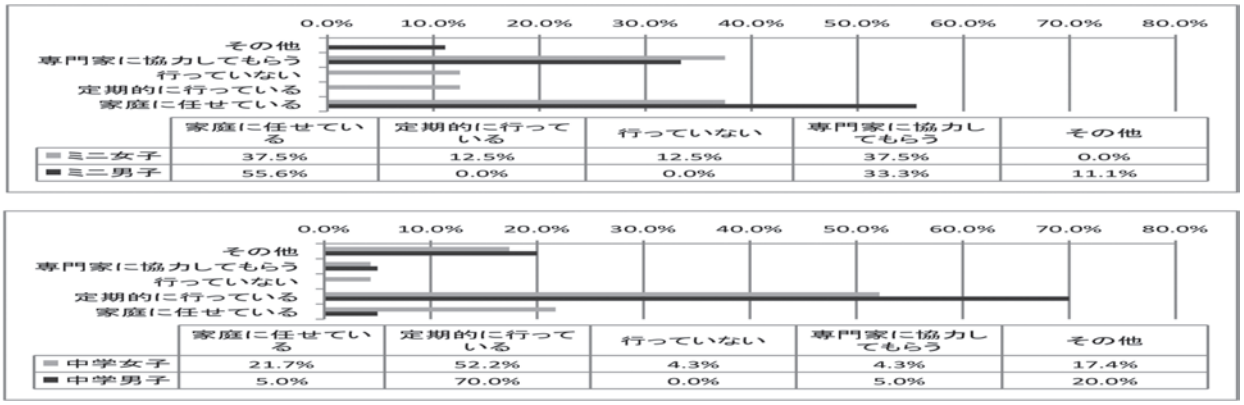


図 17　学業の指導について

である可能性が強く考えられる．本来メディカル・チェック[17),22)]の目的とは，怪我や障害を治す事が主ではなく，いわゆる怪我の防止，あるいは弱い部位の強化に繋げることにあると思われるが，しかしながら現場では殆どのチームが事前対策を考えたトレーニングの方法やプランを立てているという時間的余裕は無く，選手の状況に合わせて対処することが精一杯であり，いわゆるその場の状況に対応して行くケースが多いるようである．

このような「必要な選手のみに行っている」という回答の傾向は，中学になるに従って，強く出ていることと，女子で「行っていない」チームの割合が多いこと等も考慮すると，ゴールデンエイジという将来性を多く備えている大事な時期なだけに，本来はスポーツ指導の一貫として扱われるべき，選手の傷害に関する防止策の指導システムの構築を改めて考えていかなければならない事が指摘された．

2.　図 19 は障害防止対策に関する注意事項についての回答（複数選択可）結果を示したものである．ここでも上記のメディカル・チェックの結果を反映しているような回答となっている．殆どのチームがストレッチング以外に処方をしていない傾向が見られた．特にミニと中学との間には，はっきりとした違いが見られ，ミニの方では男子のテーピング（5.0％）が見られたのみで，その他はストレッチング以外何も行なっていないことが分かる．

中学では男女共に他の項目ともほぼ同じ傾向が見られたが，女子についてはサポーター装具の利用をしているところや，トレーニングがやや多かったのが男子と異なる点であった．

3.　図 20 は現在の指導者に就いた経緯についての回答結果を示したものである．ミニの女子では「推薦されて」が 50.0％と最も多い割合を示した．また「前任者を継いで」が 25.0％と次に多い割合を示した．男子においても同様の傾

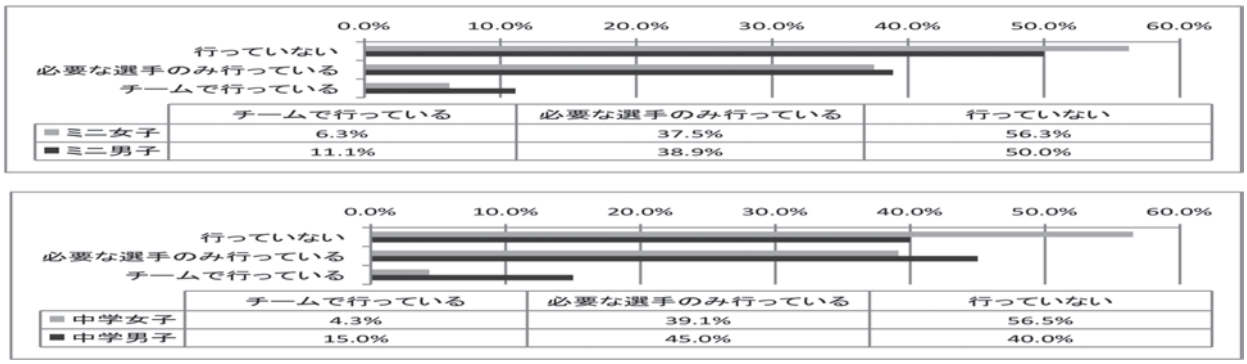
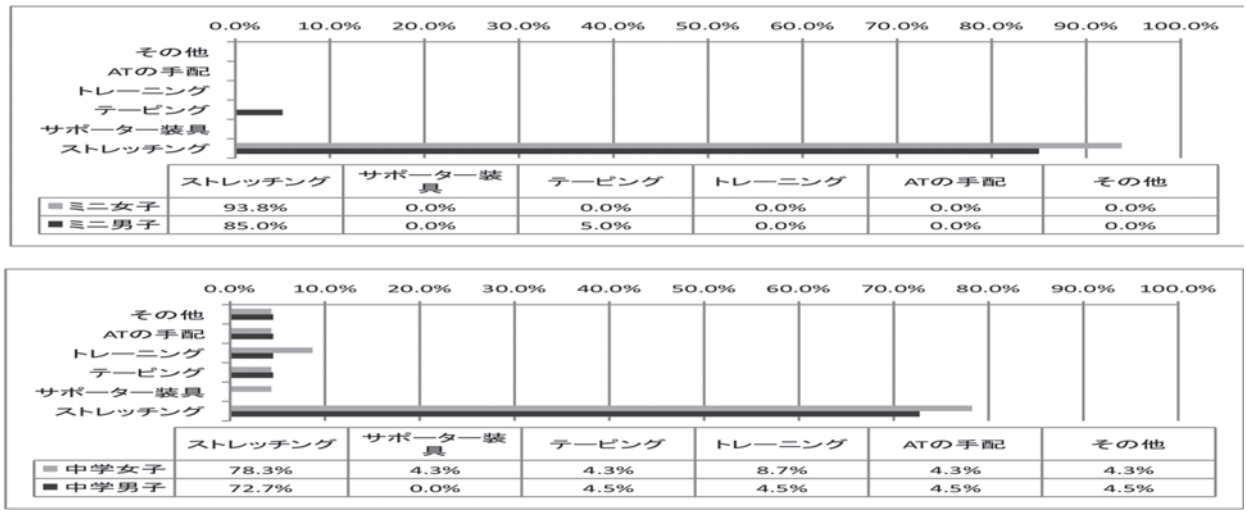


図 18　メディカル・チェック



AT：アスレティックトレーナー

図 19　障害防止対策

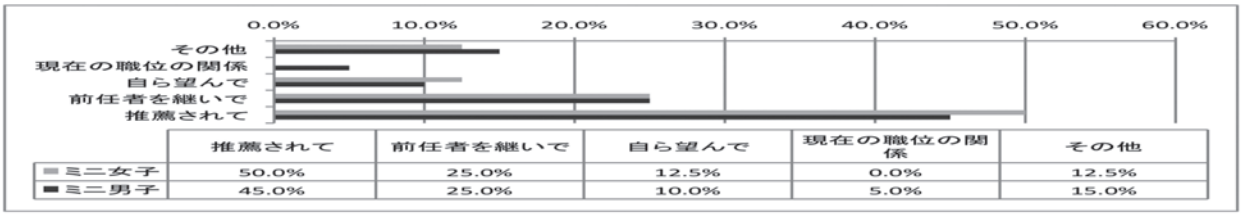
向を示していた．

中学の女子は「現在の職位の関係」が 39.1％と最も多く，次に「自ら望んで」が 26.1％と多かった．男子の方は，逆に「自ら望んで」が 39.1％と最も多く，次に「現在の職位の関係」が 30.4％で挙げられた．

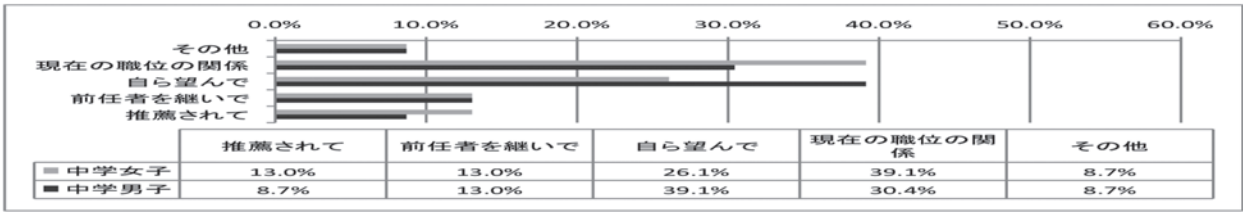
ここでは，ミニの男女共に圧倒的に推薦されて就いたケースが多かったのに対し，中学の方は自ら望んでと，現在の職位の関係で就いたケースが多かった中で，男子と女子はお互いが反対の値となっていた．中学校のチームは大半が教員の立場で就いているケースが多く，ミニと中学の違いがはっきりと現れていた．当学校の教員になっていることで顧問になっているケースについては，公立の教員の場合，時期を見て職場を移動する可能性が強く，指導計画の途中で現職場を変わらざる得なくなるという事態もありえる．従って総合的指導プランを作っている指導者にとっては，ある程度短期的な周期のプランを考え対応してゆく必要が出てくるため，指導計画の工夫も必要になってくるであろう．

Ⅳ．まとめ

本調査は，3 県（青森県，山形県，宮城県）における小学生（ミニバスケットボールチーム）と中学生のバスケットボールチームの指導者を対象としたアンケート調査を行い，最近の児童生徒におけるスポーツ指導現場の現状や課題について明らかにするとともに，今後のゴールデンエイジにおけるバスケットボール指導のあり方等について検討をするための資料を得ること



	推薦されて	前任者を継いで	自ら望んで	現在の職位の関係	その他
ミニ女子	50.0%	25.0%	12.5%	0.0%	12.5%
ミニ男子	45.0%	25.0%	10.0%	5.0%	15.0%



	推薦されて	前任者を継いで	自ら望んで	現在の職位の関係	その他
中学女子	13.0%	13.0%	26.1%	39.1%	8.7%
中学男子	8.7%	13.0%	39.1%	30.4%	8.7%

図 20　現在の指導者に就いた経緯

を目的として行なわれた．具体的には，「指導理念，指導方法に関する事項，トレーニング，食事指導，学業指導，メディカル･チェック，他」といった内容等 33 項目で調査された．その結果以上のような点について確認された．

1）指導方法

指導者全てにおいて言葉の表現は異なっているようであるが，全般に「現在のバスケットボールのスポーツ活動を通して，人間性を育てていること．勿論将来的にも「バスケットボールを続けていてもらいたい」という願いを込め情熱的に指導に当たっていることが窺えた．

競技面に関しては，技術面と精神面においてそれぞれ練習と試合での指導の違いが見られた．さらには，指導者の立場としては時間・施設などの限られた環境条件下の基で目標を掲げ，対応しながら選手の発達段階や性差などを考慮した指導が行なわれていることも窺えた．

2）体力トレーニング

トレーニングについては，特に力を入れて実施しているチームはなかった．全体的に見てあまり積極的に取り組んではいないようである．中に「体づくり」としたチーム独自のトレーニング法も用意されているチームもあった．特にミニバスケットボールでは，持久力をつけるための長距離トレーニング（持久走）を主に行なっているのみであった．中学校ではスピードを中心に，持久力，筋力などをつける目的が増えていることが分かり，競技力の向上に伴った手段を取っていることが窺えた．

3）生活指導・その他について

競技場のみに限らず，彼らを取り巻く指導環境全般におけるサポート及び支援協力体制については，家族・保護者の遠征補助・懇親会など積極的に行なわれている点が覗かれるものの，その反面，食事指導などの協力ではあまり積極的ではなく，栄養指導の認識や関心においては高くない事が窺えた．また学業面においては小学と中学とではやや差があり，上級学年になるにつれ学習習慣への意識付けが高くなっていることが窺えた．

4）メディカル・チェック

トレーニング実施同様に，各チームで真剣に取り組んでいるとは言いがたく，特にミニバスケットボールの女子チームでは，ストレッチングのみの実施だけであった．中学になると他の対策項目に若干のチームが示す傾向にあるものの，基本的にストレッチングが多かった．しかしながら，必要な選手のみの対策を行なうという意味は，すでに怪我や障害を受けてしまった選手に施すという意味の可能性が高く，怪我の予防や，強化をも含めた処方全般の対策とするメディカル・チェック本来の趣旨には適ってなく，障害防止対策における認識の低さが課題となった．

この研究は，仙台大学平成 19-21 年度の「研究計画に基づく研究費」の中で行なわれた研究成果の 1 部を報告したものである．

注　記

注 1）英国圏における「ゴールデンエイジ（golden age）」は「老人世代」とか「黄金時代（特定の分野が隆盛を誇った時期）」という意味に用いられることが多い．近年，サッカー界を中心にスポーツ分野で小学校から高校生くらい年齢の者を「ゴールデンエイジ」と呼ぶようになった．より細分化すると 8 歳～ 9 歳頃までを「プレゴールデンエイジ」，9 歳～ 12 歳頃までを「ゴールデンエイジ」, 13 歳以降を「ポストゴールデンエイジ」，15 歳から 16 歳以降を「インディペンデントエイジ」という．

参考文献

1）海老原　修（2003）学校運動部活動の現在と未来 -3:「スポーツと道徳の狭間にて - その 1-」トレーニングジャーナル ,Vol.25, No.12, pp.64-67

2）海老原　修（2004）学校運動部活動の現在と未来 -4:「スポーツと道徳の狭間にて - その 2-」トレーニングジャーナル , Vol.26, No.1, pp.65-68

3）海老原　修（2003）学校運動部活動の現在と未来 -10:「子どもの事情と指導者の期待 – その 1-」トレーニングジャーナル ,Vol.26, No.7, pp.64-67

4）海老原　修（2003）学校運動部活動の現在と未来 -11:「子どもの事情と指導者の期待 – その 2-」トレーニングジャーナル , Vol.26, No.8, pp.58-62

5）大神　訓章，浅井　慶一（2001）「バスケットボール技術及びルールに関する理解度」－中学校バスケットボール部員を対象にして－　山形大学教育実践研究 , Vol.10, pp1-11

6）大神　訓章，日高　哲明，浅井　慶一，長井　健二（2010）「バスケットボールにおける発達段階に即した技術体系と指導過程」山形大学教育実践研究 9，25-35

7）小野寺　直樹（2003）学校運動部活動の現在と未来 -14:「中体連・高体連と学校運動部部活動の関係」トレーニングジャーナル ,Vol.26, No.8, pp.60-63

8）指導者のためのスポーツジャーナル (2010)「子どもの可能性を引き出そう」(財：日本体育協会)Vol.285, pp.9-24

9）中学バスケットボール（2008）中学バスケテクニカル「冬の個人技術版」白夜書房 ,Vol, 2, No.3, pp.115 － 157

10）中学バスケットボール (2007)　中学バスケテクニカル「1- 対 -1 版」白夜書房 ,vol.1, No.1, pp.113 － 155

11）出町　一郎（2004）学校運動部活動の現在と未来 -7:「運動部の現場から①　悩める顧問」トレーニングジャーナル ,Vol.26, No.3, pp.64-67

12）出町　一郎（2004）学校運動部活動の現在と未来 -8:「運動部の現場から②　顧問からみた学校運動活動の問題点」トレーニングジャーナル ,Vol.26, No.4, pp.62-65

13）出町　一郎（2004）学校運動部活動の現在と未来 -9:「子どもと保護者の調査からみた部活と外部スポーツ環境」トレーニングジャーナル ,Vol.26, No.6, pp.64-67

14）出町　一郎（2004）学校運動部活動の現在と未来 -15:「学歴エリートのスポーツ活動から教育とスポーツを考える - 東京大学医学部バスケットボール部コーチング日記 -」トレーニングジャーナル ,Vol.26, No.12, pp.60-63

15）羽中田　昌（2007）スポーツ・システム講座 10:「子供とスポーツ教育活動」国士舘大学スポーツ科学学会，アイオーエム , pp.81-82

16）バスケットボールマガジン（2008）「楽しく，自然に，安全にバスケットボールと接しよう（前編)」, ベースボールマガジン社 ,Vol.16, No.4, pp.33-4

17）中澤　篤史（2002）「中学生における学校運動部と地域スポーツクラブの選択要因の比験」日本体育学会第 53 回大会 , 体育社会学専門分科会論文集 ,pp.164-169

18）日本バスケットボール協会 (財) 医科学研究部（1989）バスケットボール , もっと安全にもっと強く , ブックハウス H.D.，pp.17-21

19）松尾　哲矢（2004）学校運動部活動の現在と未来 -10:「学校運動部の越境を考える」トレーニングジャーナル ,Vol.26, No.10, pp.56-59

20）水上　博司（2004）学校運動部活動の現在と未来 -1:「中学校にナイター施設設置運動部保護者会の実例」トレーニングジャーナル ,Vol.26, No.9, pp.55-58

21）武藤　芳照（監訳）(1982) ドミンゲス博士の「スポーツ医学百科」ブックハウス H.D.，pp.49-52

22）横田　匡俊（2004）学校運動部活動の現在と未来 -12:「運動部の現場から③　顧問教員からみる運動部の利点と今後」トレーニングジャーナル ,Vol.26, No.5, pp.64-67

23）吉井　四郎（1986）「バスケットボール指導全書
Ⅰコーチングの理論と実際」大修館 ,pp.69-75
24）吉川　彰彦・中祖　嘉人（2006）「学童期に何を
教えるのか」http://www.tcat.ne.jp/~happys-
guts/golden-age.pdf#search

2010 年 11 月 30 日受付
2011 年 2 月 8 日受理